

10 月度木曜例会 (Oct 6, 2016)

今日は、皆さんよくご存知の Matt さんをお迎えしました。2000 年から 1 年間、留学生として新潟に滞在し、その後、今日に至るまで計 17 年間日本で暮らしておられます。芸術から食べ物、武道、哲学、音楽、ゲーム、モンスター等、何にでも興味を持つ自分を”full time learner, dreamer and explorer”と称する、アメリカ事情通の Matt さん。今日は、IIN で記念すべき 10 回目の講演です。



Let's Get Hitched!

Mr. Mathew Allen Sawyer-Long (San Francisco, USA)

get hitched は“結婚する”という意味であるが、カジュアルなイメージでアメリカの古い表現。私には、カウボーイがドアを開けるなり、“さあ、結婚しよう！”と言って、さらっていくイメージ。hitch という言葉は、電車を連結する時の connect や、馬を杭につないだりする時の tie の意味があり、“逃れられない”というニュアンスがある。

人の一生に、生→学校→結婚→子供誕生→死の 5 大イベントがあるなら、結婚はその真ん中に位置する、非常に重要なイベント。そこで、結婚に焦点をあててみては？と思った。また、2ヶ月前、妻の友達の結婚式があり、日本の伝統的な式だと聞いていたので、楽しみにしていたら、披露宴で新婦はウエディングドレスに結婚指輪…。これって、本当に日本の伝統的なスタイル？What is a traditional marriage? イメージは伝統的でも、その中に、多くの他の文化が混ざっているのだと分かった。全世界の結婚について話していたら、とてもではないが時間がないので、今日はアメリカ、そして私個人の結婚に絞ってお話ししたいと思う。

アメリカでは 95%以上の方が結婚する。結婚の平均年齢は、女性 26 歳、男性 28 歳（日本では、各々 29 歳、31 歳）だが、10 代で結婚する人もいれば、60 歳を過ぎてからの人もいて、人生はさまざま。結婚する理由も、愛とは限らず、お金、親に言われたから、隣近所だから…とさまざま。勿論、愛のためだけに結婚する人もいる。

大きな転換期は 1950 年代。元々アメリカでは、結婚しても夫（或いは妻）の家に入る、という考え方はないが、第二次大戦後は、両親とは別に住むようになり、子供は平均 3~4 人、この核家族が理想の家族像となった。1950 年代は golden age of marriage と言える。結婚の平均年齢は 21 歳、と若い。そのため、結婚生活も長い。若くして結婚するのが理想で、日本女性のクリスマスケーキ(25 歳を過ぎたら…!)、

という考えもアメリカから来たのだと思う。

1950年代は、私の祖父母の時代にあたり、彼らの結婚生活も今では62年を迎える。こんなに長い間、一緒に暮らすなんて、すごいことだと思う。この時代の家族像は、“I Love Lucy”や”Father Knows Best (パパは何でも知っている)”、”Bewitched (奥様は魔女)”などのTVドラマに象徴されている。結婚することは、“sacrifice”、“dedicate”、“give up”、“support”という言葉とつながり、結婚生活は、結婚1年目、7年目に大きな危機が訪れるという。それを乗り越えれば、大丈夫。



祖父母の結婚60周年記念パーティのカードから



60周年記念パーティの参加者は約100人!

だが、私の父母の時代は、違う。1970年代、1980年代は、理想の家族像が大きくなりすぎて、それがストレスになった時代。公民権、女性解放、フェミニズムが謳われ、工場閉鎖や経済危機に見舞われて、それまでの家族像が現実合わなくなってきた。離婚率は50%を超えるようになり、再婚は、珍しいことではなくなった。

私の世代は、結婚年齢は上がり、離婚率は3~4人に1人、と下がっている。これは何故だろうか? money, job, stability, communication といった要因が考えられるが、私にも分からない。

私の父母や祖父母の時代は、異性の友達と2人で出かけることは考えられなかったが、最近では、親しい異性の友達が数人いても不思議ではない。また、以前は、デートは男性が申し込み、デート代は男性が支払うものだったが、最近はそうとは限らない。

アメリカでは、婚約してから6ヶ月から1年程で結婚することが多い。

また、rehearsal dinnerがある。結婚式の前日に、両家の家族と一緒に食事をする。私の場合、国際結婚で、言葉の問題もあったため、お互いが知り合い、打ち解けるのに良い機会となった。

アメリカの典型的な結婚式 white wedding は、両家の家族と新郎が前に立ち、花嫁の登場を待つスタイル:



昔のデートのイメージ

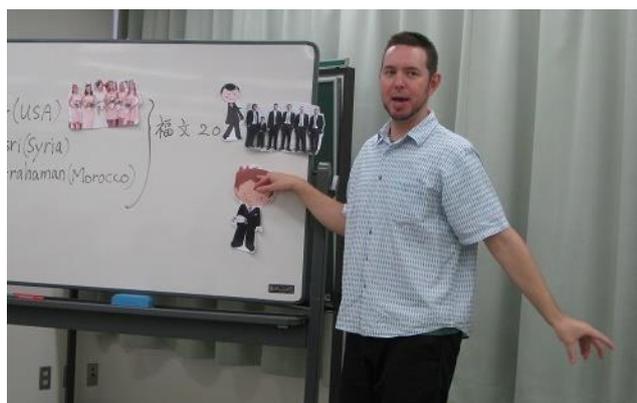
まず、新郎側の付添い人である **groom's men** と新婦側の **bride's maids** が登場。**groom's men** の中には、**best man** (新郎と一番親しい友人や兄弟) や、結婚指輪を持ち運ぶ重要な役割を担う **ring bearer** (通常は、新郎の従兄弟や甥など、親戚の子供) もいる。



次に、音楽が盛り上がって、**flower girl** が花を巻きながら登場。



そして最後に、新婦が父親に付き添われて登場する。



誓いの言葉、キスや指輪交換など、式そのものは 15 分～20 分で終わる

新郎のそばが **best man**(向かって左端)、その隣が **ring bearer**

式が終わると退場するが、この時、皆でお米を投げる。なぜ、お米なのか？米は種子なので、生命を与えるということ、即ち“子供”につながる。お米はお金、幸せにもつながるので、”**Take my food/money/happiness! Let's share!**”ということ。

式は、教会の中ではなく、屋外で行われることが多い。私の周りの人も、ほとんどが屋外。式の後には、パーティがある。これは日本と同じだが、大きな違いはダンスがあるということ。ダンスのないパーティは考えられない。そして、**best man** のスピーチは必須であるが、それ以外の人々のスピーチは自由で、話したい時に話す。

以上が伝統的な結婚式である。調べてみると、**white wedding** は 1840 年、イギリスの **Queen Victoria** と **Albert** の結婚式が発端であることが分かった。白のウェディングドレスは、もっと何千年も前から伝わる伝統かと思っていたら、比較的最近のことだと分かって、びっくりした。ヴィクトリア女王の結婚式以前は、**purity of spirit** を表す青色が人気で、それより前は、**life/fertility** を表す緑色が人気であった。

青は今でも重要な意味を持つ。結婚式で幸運を呼ぶと言う詩がある：

Something old

Something new

Something borrowed

Something blue

新婦は、この4つの物を身に着ければ、幸せになれると言われている。old は伝統を、new は未来を意味する。borrow は、母親や祖母、友達から幸せを分けてもらうこと、そして blue は力、純粋を表す。ブーケやティアラ、靴、イヤリングなど、身に着けるものであれば何でもよい。

また、結婚式当日、新郎は、式が始まるまで新婦に会ってはならないとされている。壁越しに話すことはできても、見たらダメ！ウエディングドレスは、当日のサプライズとされているので、選ぶ時も通常は母親と行く…私の場合は、妻と一緒に買いに行ったので、既に知っていたが！

ハネムーンは、元々、遠くに住む親族を訪問することを意味していた。結婚式に出られなかった親族に、新しく加わった家族の一員を紹介することであった。だが 1920 年代から変わり始め、家族への紹介よりは、これからの現実に入る前の束の間の休息を！という意味合いが強くなった。因みに、ナイアガラの滝は、以前は人気の新婚旅行先だった。私は、全然ロマンティックとは思わないが…。

アメリカ南部では、結婚式には様々な習慣がある。

- ・ニューオーリンズでは、音楽と共に新郎新婦とその家族がパレードをする。
- ・バーボンのボトルを、結婚式を行う場所に埋め、当日掘り起こして皆で飲む。これは、晴天を祈るため。
- ・ケーキの中に小さな花やコイン等、何か象徴的なものを隠す。皆でケーキを分けて、それを当てた人は次に幸せが！これは、ブーケトスと同じ考え。
- ・ラスベガス・スタイルの結婚式：5分で結婚が完了する。或いは、マクドナルドのように、ドライブスルーの結婚式もある。
- ・結婚式の再現：結婚 30 周年や 50 周年のお祝いとして、結婚式をもう一度行なう。式と言っても、指輪の交換をするのではなく、お互いを感謝し合い、再度誓いを述べる、結婚の再確認のようなもの。新しい出発とも言える。

今日のお話の中では、何と言っても、Matt さんと奥さんの馴れ初めのお話が一番興味深かったです。アボカドから始まった、ロンドンでの運命的な出会い。なんてロマンティックなのでしょう！

Once is chance,

Twice is coincidence,

Three times is fate.

と言った、Matt さんのお祖母さんの言葉が忘れられません。生まれ変わったら、今度は運命的な出会いを試みたいものです!!



Matt さん、ハワイで挙式

